

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.13 / 2007年 春

心と体が一体になって、
初めて立派な人間が育っていくのです。

地球となかよしインタビュー

スポーツを通して人間力を育む 川淵三郎さん 2～3

知っておきたい教育NOW
生涯学習の未来像―団塊世代の動向を踏まえて― 西野卓郎 4～5

「敬語の指針」について 長尾高明 6～7

名人の授業「小宮路 敏先生」 伊藤俊彦 8～9

地球となかよしトピックス 動物園といっしょにできる教育―旭川市旭山動物園― 奥山英登 10～11

インフォメーション 北から南から 12～13

BOOK REVIEW 14 / コラム 10代心のカルテ その 香山リカ 15

ほつとな出会い 梅沢由香里さん 16



スポーツを通して 人間力を育む

川淵 三郎さん

(日本サッカー協会キャプテン)



PROFILE

1936年生まれ。大阪府出身。高校時代からサッカーを始め、早稲田大学、古河電工と強豪チームで活躍。ローマオリンピック、W杯チリ大会予選、東京オリンピックなどに日本代表として出場。91年からJリーグチェアマン。02年より日本サッカー協会キャプテン、現在に至る。

**子どもたちの体と心の健全な発達のために、
スポーツに携わる者の果たす責任があるんです。**

サッカー界の底辺はますます広がり、注目度も上がってきています。

サッカーの人気度や世間に与える影響は、十年以上前とは比較にならないくらい高まっています。当然、サッカー協会としても社会的な責任があります。お客様の関心を引き、感動を与えていければいいということではありません。

将来、日本が強い代表チームをつくっていくためのエリート教育も大切ですが、大多数は草の根の子どもたちです。そういう子どもたちに、サッカーを通じてどういうことを伝えていけるのかを考えてみると、今までは、技術は指導者を通じて伝えてはいる。けれども、本当のフェアプレーとは何か、社会生活を営んでいく上で大切なものは何かということとはほとんど教えていない。あいさつをさせたり、フェアプレーの精神論を教えたりしていても、本当に心の中に入り込んで教えているとは言えないわけです。

だから、我々はまだ十分に社会的な責任を果たしていないという思いが強くある。せっかく子どもたちとふれあう機会がこんなにたくさんあるにもかかわらず、サッカーの技術だけ教えていていいんだらうかと。それは絶対そうじゃない。JFA（日本サッカー協会）には、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献するという大きな理念があります。そういう意味からも、我々はもっと努力する必要があるんです。

今年の四月から、東京の四区と横浜市、さいたま市で「JFAこころのプロジェクト」を始めました。元日本代表や現役Jリーガーが「夢先生」となって学校に赴き、子どもたちに夢を伝え、生きるために必要な精神を育めるようなサポートができればと。

それはやはりスポーツに携わっている者の果たす責任があるという思いからです。心と体が一体となつて、初めて立派な人間が育っていくのです。だから、これから「心」の中に本格的に入り込んでいきたい。将来、サッカーを教える指導者全部が、同じ考え方のもとに子どもたちにそういうものを伝えていくことになる、今年はそのスタートの年と言えます。

今年は、元日本代表や現Jリーガーが中心となつてそれを伝えていくということにしています。多くの子どもたちには、人間として必要な素養を育んでいくためには、各地で活動するすべての指導者が理念を共有して、子どもに伝えていけるようになる必要がある。また、サッカー界だけでなく、スポーツ界全体に広めていきたい。それが僕が一番大きな夢です。

そのために重要なのは、夢を伝える「夢先生」側をしっかりと育てることです。先生となる者の人間性が大事なんです。子どもは敏感ですから、心から訴えかけないと、「先生」に敬意と感動を持たないでしょう。

「心」のことを伝えるという先生の役

目を果たすことが、どれだけ自分にとって有意義であり、また、世のため、子どもたちのためになるか、きちんと理解することが大切なんです。ですから今、一生懸命、「先生」の養成をしています。

サッカー界は、子どもとかかわりをもっとも大事にしていますね。

やはり、子どもがすべてだという思いがあります。やさしさや我慢する気持ち、人を思いやる心などは、大人になってからの行動に自然とつながると思います。

アンダーシックス(U6)という、六歳以下の子どもたちにスポーツの楽しさを教える「キッズ・プログラム」という取り組みも行っています。今、子どもたちが外遊びをしなくなっていますが、そのことで、肉体・精神の発育が、今までとは違う方向に向かっていくように思います。スポーツの楽しさを伝えることによって、子どもたちが外に出て遊ぶことを楽しんでいることが大事なのです。

二〇〇五年には、延べ七十万人もの子どもたちがこのプログラムに参加しました。これは、サッカー選手に育てようというのではなく、子どもたちの心身の健全な発達のサポートをしたいという考えでやっています。

「アカデミー福島」という取り組みもされていますね。

JFAが昨年からスタートさせたエリート教育です。全国から選ばれたアカデミー生は福島県双葉郡にあるJFAアカデミー福島で寮生活を行いながら、近隣

の中学校、高校に通い、アカデミーでは、優秀な指導者と素晴らしい環境のもとでサッカー指導を受けます。地域とのつながりも大切にしており、例えば、サポートファミリー制度をつくり、地元で親代わりの人を見つけて、子どもたちが休みの日にそこに行くとか、地元の人たちと交流するといった活動もしています。地域とかかわりは、Jリーグの設立理念とも通じるものです。

この取り組みは将来の日本代表育成というのが第一目標ではありません。しかし、まず大事なことは人間教育なんです。仮にサッカー選手として一流になれなかったとしても、人間として立派に成長し、学業もきちんとでき、本人も周りもJFAアカデミーに行っていてよかったと思える。そうやって初めて、この取り組みが成功したと言えるんです。

一年間たちまちですが、海外遠征をさせたり、地元で田植えをしたり、著名な人の話を聞いたり、いろいろな得がたい経験ができています。我々としては、こういう経験をしながら、人間的に立派に育っていきけるようにベストを尽くしていきたいと考えています。

今、社会で子どもの育ちに関して、いろいろな問題が起きています。

僕はやはり世の中、とりわけ家庭の問題が大きいと思っています。今の日本の社会は、責任を全部他人に押しつける風潮があり、子どもの教育に、皆が一致団結して向き合っていない。全部学校の責任にされてしまっていて、学校の先生は

孤立無援の状態です。

例えば、今、低体温の子が多い。夜寝るのが遅く、本来体温が上向きになるはずの起きる時間に、一番体温が低い三時、四時ぐらいの体温です。だから朝ごはんも食べられない。それで八時ごろに学校に行く。そういう中で子どもに、何でちゃんと授業を受けられないんだ、何でぼうつとして集中力がないんだと言っても無理があります。集中力がない、四十五分間の授業中じっと聞いていられないというのは、その前にやるべきことが家庭でなされていないからです。家庭で、早寝早起き、朝ごはんをしっかりやれば、今の子どもたちの状態は変わっていくはず。

また、子どもが外遊びをしなくなっています。これも世の中での責任ですが、家の中にばかりいるから、腰と背骨の筋肉がなかなか成長しなくて、ちゃんとした姿勢が保てない。だから背もたれしたり、机にはおづえをついたりして、授業への集中力がなくなる。それなのに、授業をしつかり聞けと言ってみたとこで始まらない。外で遊んで体を鍛える、自然とふれあう、年長の子と小さな子が外で一緒に遊んで社会性を培う。また、そういうことに地域がどう絡んでいくのかも考えなければならぬでしょう。

今の子どもにこういう問題が数多く発生するのは、子どもだけに言ってもしかたがないことです。家庭、世の中のあり方が大きいと思いますね。

そこで例えば、U6の子どもを教えていると、両親だけでなく、おじいさんや

おばあさんも見に来てくれるんですよ。そういう機会を利用して、保護者の教育もできないかと、今、真剣に考えているんです。

最後に、子どもたちを指導していくことと、子どもたちとかかわっていくことについて、メッセージをお願いします。

僕が指導者に常に言っているのが、子どもと子どもを比較するなということです。例えば、実力のレベルが1から10まであるとすると、お前は5だから7の子、8の子に負けているじゃないかといったやり方は、むしろ、努力しようという気持ちを萎えさせるものです。

その子の今の実力が5であつたら、それを5・5、6にするためにどうしたらいいのか、ということを生徒とその子が一緒になって考える。少しでも進歩したら子どもと一緒に心から喜んでやる。そういう気持ちや姿勢が子どもには伝わるんです。だから、一人の子どもを、他の子との比較で見ないということが一番大事なことはないかと考えています。



アカデミー福島の生徒製作のカップ▲

生涯学習の未来像

―団塊の世代の動向を踏まえて―



公立大学法人 首都大学東京 オープンユニバーシティ事務室課長補佐 西野卓郎

「オープンユニバーシティ」の開設と展望

都立の四大学が統合され、二〇〇五年四月に公立大学法人として「首都大学東京」が新たなスタートを切ると同時に「オープンユニバーシティ」（以下OU）を開設した。これは首都大学東京（以下、本学）が有する知的財産を広く開放し、都民の生涯学習に貢献するための新たな企画であり、将来の生涯学習を展望しながら、展開を始めたものである。

本学における生涯学習は、首都圏に在住する広範な人たちが希望に応じて高度な教養、知見、技術などを学ぶ場を提供することを目的としている。人生には多様な局面があつて、直面する課題に応じて、適宜必要な学問領域を修めていくことができれば理想的であろう。

例えば、米国においては各種の奨学金を得ながら、生涯を通して就業と大学及び大学院教育とを交互にキャリアアップしながら学位を取得することは常識になっているという。一方、わが国では、大学教育は青年期に一回だけ受けるのが通常であり、米国のような社会風土は確立されていない。新設された本学のOUにかかわるものとして、生涯教育の未来像について考えたい。特にこれから大量退職を迎える団塊の世代の動向も踏まえて展望してみたい。

首都圏における生涯学習の現状

東京をはじめとする首都圏には、多数の大学、東京都内だけでも国公私立あわせて百二十校以上が存在し、多くの大学が規模の違いはあれ、産学の連携による技術支援や公開講座などにより地域貢献に取り組んでいる。特別講演会など単発的な公開講座を除いたものを生涯学習講座と呼ぶこととすると、現状は、大雑把な流れとして次のようであると思われる。

- 一 高齢化社会における主として退職者や高齢者層を対象とする老後の生きがいづくり
 - 二 現役の勤労者層を対象とするキャリアアップのための自己投資（資格、語学等）
 - 三 主婦層の自分磨きや、女性の社会進出のための支援
- こうした現状を踏まえて、本学のOUが将来的にも発展的に継続できる生涯学習の場を確立するには、どのようにすればよいのだろうか。

生涯学習の将来構想―学位取得支援システム

一つの展望としては、生涯学習講座で得た成果を蓄積できるような単位取得システムの実現である。

本学は開学時に「単位バンク」という制度が導入された。これはあらかじめ他の教育機関での学修や専門機関での修得実績を正規授業の単位として認定するシステムであるが、まだ十分には機能していない。OUはこのシステムを活用し、時間の許す範囲で特定の講義科目を受講し、修得した人に単位取得を可能とする方向を探っている。講座を系統立てて開設することにより、勤務や主婦業などを継続しながら最終的には学位の取得への道を開こうとするものである。

OUの講座の中に大学の一、二年次の教養科目群や三年次以降の専門科目群の主要なものを提供することにより、高卒者が大学の学士号を取得したり、特定の学士号取得者が他の専門分野の学士号をも取得したりできる道を開くことができるだろう。

特に大学院レベルの講座にこのシステムを運用すると、現場で日夜奮闘している勤労者、公務員、教員など現場で必要となるスキルの修得にも役立つだけでなく、危機管理なども含めた社会的ニーズに合った高度で系統的な講座の設定により、現場で一層のリーダーシップを発揮できる人材を育成できる可能性も生じてくる。本学のOUではすでに試行的に資格取得に役立つ講座の開講を進めている。

団塊の世代への期待

生涯学習の業界では、いわゆる団塊の世代の退職期を迎え、この世代の取り込みが課題と認識されている。

筆者は、団塊の世代の人たちには現在開講されている現状の生涯学習講座を受講することだけでは満足してもらえないのではないかと思っている。高度成長期、大学紛争、オイルショック、バブル期、不況期を乗り切ってきたこの世代は、過去の実績に自信を持ち、自己のスキルと趣味への執着と何か新

19年度春期(4月～6月)開講の教員向け講座

主な対象	講座名	期間	曜日・時間	回数	キャンパス
国語	心に届く読み方をめざして—ことばとからだのレッスン	5/13～7/1	日曜日 10:00～11:30	8回	飯田橋
国語	日本語教授法と教育メディア1(大学院レベル講座)	4/17～5/29	火曜日 19:00～20:30	6回	飯田橋
高校生物	ティーチング技術(高校生物授業:内容研究)大学院レベル講座	4/17～7/10	火曜日 18:30～20:00	12回	飯田橋
高校生物	【生物の多様性とその保全】大学院レベル講座	4/19～7/12	木曜日 18:30～20:00	12回	飯田橋
高校生物	【生命の科学:ミクロからの視点】大学院レベル講座	5/12～6/16	土曜日 14:40～17:50	6回	南大沢
生徒指導関係	社会の中の個人と他者	5/11～6/15	金曜日 19:00～20:30	6回	飯田橋
教員全般	困難をかかえた子どもの臨床発達支援	4/23～5/21	月曜日 19:00～20:30	4回	南大沢

19年度夏期(7月～9月)に開講予定の教員向け講座

高校化学	高校化学教員のためのリカレント
小学校教員	小学校教員のための食育指導力アップ講座

この他、「大江戸東京の歩き方」「美術館探検隊」「都市・江戸東京—水辺の風景」「もう一つの北米の国・カナダ」「武蔵野が語る地球環境変化の歴史—関東平野の形成メカニズム」など総合学習の参考となる講座等も多数あります。

各種福利厚生団体等の構成員の方については、割引制度がある場合もございます。各団体の提供情報をご確認ください。

問い合わせ先 首都大学東京オープンユニバーシティ事務局 TEL 042-677-2362

しいものに挑戦したいというエネルギーを持つているように感じられる。生涯学習講座に単に受動的に参加するよりも、むしろ自分が地域や専門分野でサークルなどのリーダーになり、講座を企画実践し、あるいは同世代または次世代を啓蒙したいという意欲を有する世代ではなからうか。

この世代が生涯学習に能動的に参画して行くことは、結果的に、生涯学習講座を運営する大学側も変革を求められることになる。すなわち、多様な価値観を持ち、さまざまな経験を持つ受講生に対し、大学教員は受講生のニーズにあったカスタマイズを行うことが、これまで以上に必要なことになる。また、企画運営に携わる事務職員もプロフェッショナルとしての力量が問われることになるだろう。広報媒体にPRを打つだけでなく、広報効果測定や講座ごとのきめ細かい媒体・広報ルートへの選択はもちろんだが、営業活動によるニーズの把握とフィードバックなどが、これからますます重要性を増すことは間違いない。

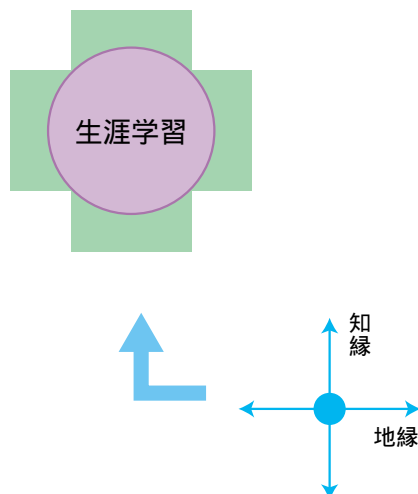
「失敗学」などで有名な畑村洋太郎工学院大学教授は著書で、「技術というのは本来、『伝えるもの』ではなく『伝わるもの』とした上で、『このときに伝える側が最も力を注ぐべきことは、伝える側の立場で考えた『伝える方法』を充実させることではありませぬ。本当に大切なのは、伝えられる相手の側の立場で考えた『伝わる状態』をいかにつくるかなのです。」(講談社現代新書「組織を強くする技術の伝え方」太字ママ)と指摘している。この指摘は基本的に大学の学部や大学院の学生を対象にしている正規の大学教育はもとより、むしろ生涯学習教育に携わるものにとつて重要な意味を持つことのように思われる。

団塊世代の持つこのようなエネルギーを活用することは、ワークシェア、子育て環境の整備、ゆとり時間の創出など、ますます生涯学習が求められる社会的

会変革へつながっていく可能性を秘めている。例えば、核家族化の進んだ都市において、子育て経験を持つ元気な高齢者が保育に関するリカレントを受け、血縁ではないが、「地縁」祖父母、あるいは「知縁」祖父母として子育てをサポートしてもらえるようになるれば、若い子育て世代は大いに心強いことになるだろう。

終わりに

本学は都立の大学の使命として、すでに都庁をはじめ各区市町村や関連の公共団体と連携した講座の実施、研修の受託、講師の紹介・派遣等を行っている。これからは企業やNPOなどの多様な社会的セクターとも連携、協力を深めていきたいと考えている。今、生涯学習教育は「地縁」と「知縁」の交差点に立っている。



VERITAS VOS LIBERABIT (真理があなたを自由にする)

これは本学図書館本館に掲げられているラテン語の諺である。生涯学習が当たり前のこととなり、「生涯学習」と言われなくなる時がくれば、誰もが自由になれることを祈念しつつ結びとしたい。

「敬語の指針」について



宇都宮大学名誉教授 長尾 高明

「指針」が出された背景

敬語の使い方に関しては、昭和二十七年に国語審議会が建議した『これからの敬語』があり、教育界では現在まで一応の基準になっている。しかし、かなり古いものでもあり、一つには、例えば二人称代名詞について「あなた」を基準とするとしているが、「あなた」は次第に敬意が下がっており、現在では目上・年上の人には使いにくい、などのように人々の意識が変化していることもあり、また一つには、その後の敬語研究をふまえた新しい方向づけが必要になってきたこともある。最近の動きとしては、平成十二年十二月に出された国語審議会答申『現代における敬意表現』があり、今回の文化審議会答申はそれを受けたものである。全体は三章（敬語について・敬語の仕組み・敬語の具体的な使い方）から成り、具体的な場面を想定した用例も多く取り入れ、かなり詳細なものになっている。

これについては、新聞紙上でも、批判する学者の見解等が報道されたが、後述するように、とりわけ教育の分野で議論が出るものと予想される。

敬語についての考え方

今回の答申でも、平成十二年の『現代における敬

意表現』と同様に、「相互尊重」「自己表現」に大別して敬語のはたらきを解説している。また、方言における敬語の多様さに配慮し、さらには、とくに批判の多いマニュアル敬語に対しても一定の理解を示すなど、柔軟な姿勢を示そうとする態度がうかがえる。しかし一方では、新しい伝達媒体（ファクシミリやメール等）における敬語使用の減少という傾向に警告を鳴らし、学校教育での「体系的な学習」を促している。さらには、今回の特徴とも言える五種類の分類について、「従来の指導と対立するものではない」と述べながらも、今後「ここでの考え方をじゅづぶんふまえた取り扱い」を提唱するなど、今回の指針が教育現場に反映することを強く期待している。

全般的に評価すれば、具体的な用例も豊富であり、わかりやすい説明にはなっている。ただし、解説の用語は従来と違う点も散見するが、これをそのまま学校に持ち込むと混乱を生じるおそれもある。とりわけ、従来「敬意」と表現してきたものを「立てる」という表現を用いている点はまだしものこと、謙讓表現の説明に用いていたいわゆる「動作の受け手」を、「向かう先」と呼ぶが、ややなじみがない用語でもあり、「向かう先」と「相手」との違いなど、小・中学校の教師は説明に苦労するかも知れない。

五種の分類について

尊敬・謙讓・丁寧という三分類は、長く教育界の主流をなしてきたが、それでは少々粗いという理由で、もう少し詳細に分類する考え方が支配的になった。三分類する説は、吉岡郷甫の「尊敬・謙遜・丁寧」（『日本口語法』明治三十九年）が先駆とされるが、その後、数多くの学者が敬語研究の中で分類にも言及してきた。最近では、話題の敬語（素材敬語）と対話の敬語（対者敬語）とに大別して、その下位分類を示す考え方が一般的に支持されている。今回の答申は、最近の通説をもとにしたもの（ただし、従来の三分類から離れすぎないよう配慮したもの）であるが、話題の敬語と対話の敬語とに大別することなく、並べる形で五つの分類を提示している。すなわち、「尊敬語・謙讓語・謙讓語（丁寧語）・丁寧語・美化語」の五種である。これを従来の三分類と対照させてみると、次のようになる。

三分類		五分類	
尊敬語（動作主尊敬・シテ尊敬）	謙讓語（対象尊敬・受け手尊敬）	尊敬語	謙讓語
丁寧語（聞き手尊敬）	美化語	謙讓語（丁寧語）	美化語

（注）定義および語例

尊敬語 相手側または第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。

（語例）おっしゃる、いらっしゃる、召し上がる

謙讓語 自分側から相手側または第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。

（語例）伺つ、申し上げる、さしあげる

謙讓語 自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。

（語例）参る、申す、いたす、存じる、おる

丁寧語＝話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。
(語例) です、ます
美化語＝ものを美化して述べるもの。
(語例) お酒、お料理

(付) 美化語については、これを敬語(人間関係を示す語)に含めるか否か、異論もあるが、「指針」では敬語の中に入れて扱う立場をとっている。

因みに、私は平成十七年四月に刊行した『敬語の常識』(溪水社)の中で、「尊敬語(動作主尊敬)・謙譲語(対象尊敬)・謙遜語(謙譲語B)・丁寧語(聞き手尊敬)・美化語」という分類を示しており、偶然、今回の答申とほぼ一致している。ただし、私の場合は、分類は便宜的なものであり、私の主張する敬語の考え方の主要な部分ではない。その点については、学校教育の立場からの論述の箇所述べる。

敬語を分類して整理することは、あくまでも敬語研究の一つとしての作業であり、これを教育の場にそのまま持ち込むことにはやや困難があるうし、一般の人々にとっても、具体的な場における心得や言葉遣いこそが問題なのであり、敬語の体系的な知識が必要不可欠のものではなからう。

謙譲語 (丁寧語) について

今回の指針で最も注目を引くのは、謙譲語の提示であろう。三分類で謙譲語とされていたものの中で、例えば、「伺つ」と「参る」とを比較しても、

先生のお宅に伺います。
弟の所に参ります。

を比べてみれば、は動作の受け手(向かう先)への敬意を示したものであり、は会話の聞き手に対して丁寧に述べる表現である。

謙譲語 と謙譲語 との違いは、右の の例は「先生」への敬意であるから、「父の所に伺います」とは言えない。また、は聞き手への敬意であるから、

「父の所へ参ります」とも言える、という点にある。さらには、謙譲語 は自分側の行為について用いる語であるから、「あなたはどちらに参りますか。」などと相手側の行為には使えない。また、謙譲語は「ます」を伴わなくても使うことができるが、謙譲語 は一般に「ます」を伴って使う。
丁寧語と謙譲語 とは似ているが、謙譲語 は自分側の行為についてのみ使えるのに対し、丁寧語は広く様々な表現に使える。

学校教育での扱い

答申は教育の場を直接想定したものではないが、前述のごとく、いずれはこれを学校教育に生かすことを期待しているし、早晚、文部科学省が学習指導要領等に記載してくることが予想される。しかし、とりわけ五種類の分類をそのまま教科書に記述することには問題がある。教育の場での扱いで気がかりな点をまとめればおよそ次のようになる。

この分類を覚えさせるような指導が行われるのは、いたずらに生徒の負担を増すだけで、実際の言語生活に役立つわけではなからう。

文法用語は少ないほうがよい。謙譲語 は、それに属する語が少なく、そのために一つの分類項目を立てることが、教育の場で真に必要なか。

現在の傾向として、丁寧表現が主流になっており、体系的な敬語の知識が不可欠のものとは言いがたい。

先にも引用した拙著『敬語の常識』の中で、私は敬語を次のように定義した。

「敬語とは隔たりの意識を表明する言葉である」

長年国語教育に携わってきた経験から、敬語の用法をもっとわかりやすいものにしたい、という感想を持ち続けた。現実には、「尊敬・謙譲」という概念が希薄になってきており、敬語を苦手とする人の

多くも、敬語に対する認識の点にその原因があるように思われる。そのため、右に記したような定義を試みたのであり、それを例えば「久しぶりのクラス会、子供を叱る場面、留学生の悩み」などいくつかの具体的な事例で実証した。

先の定義を言い換えれば、敬語意識とは、「相手との距離をどのように測っているか、という意識の表れだ」ということになる。今の若者は言葉を知らない、という批判の多くが敬語に関する点であることは事実だが、そういう事例、つまり敬語の不使用が相手を不快にさせるのも、隔たり、すなわち、あまり親しげな口をきく関係(または場面)ではない、という意識がはたらくからである。

念のため、敬語意識(心理的な隔たりの意識)がはたらくのは、次のような人間関係の場合である。

上下の関係(年齢、地位、など)

親疎の関係(いわゆるウチとソト、など)

立場の関係(店主と客、依頼する場面、など)

また、現代の敬語は、丁寧表現が主流になっているのではない。通常は、相手に対して丁寧な表現を用いれば一応はすむ。例えば、

電車が入って参ります。(駅の放送)

この鳥はトキと申しまして。(ガイドの説明)

そこを右に曲がってください。(タクシードライバー)

などの言葉遣いは、いずれも丁寧な言い方、という意識の表れであり、これを、無理に は謙譲語、 は尊敬語 というように説明する必要があるだろうか、という問題も生じよう。さらに言えば、

例えば、「お()……する」の表現は、現在では最も評価が揺れている例であり、

この電車は当駅止まりですので、ご乗車できません。

ご指導してください。

などの言い方も、現在では、気にならない(丁寧な表現だ)という人のほつが多くなってきている。

名人の授業

vol.3 小宮路 敏 先生

伝えておきたいあの先生の授業。

今回は、「あくまで子どもが主役」の理念のもとに音楽教育を実践する，
「小宮路敏先生」(元玉川学園小学部教諭)を 伊藤俊彦先生にご紹介いただきます。

教師は子どもたちにとっての 最大の教育環境

授業開始前，教室から季節の歌，行事の歌そして子どもたちが創った生活の歌が次々と響きわたる。次いで「ハローハロー」の部分四部合唱の力強い響きが教室いっぱいに広がり，子どもたちの生きいきとした表情と明るい歌声の中で，授業開始のあいさつが交わされる。小宮路敏先生も子どもも，そこには活気がみなぎっている。何とすてきな雰囲気なのか。教師と子どもを音楽で結び付けた三位一体の教育環境がどのようにして生まれているのか，探ってみることにする。

元日本音楽教育研究会小学校部会長 伊藤 俊彦



▲小宮路敏先生

愛ある教師に脱帽

小宮路は，温かい眼差しと微笑みをもって子どもに接し，子どもの発想や発言を特に大切にしている。そして，常に子どもの心情や考えを，汲み取ろうと努めている。このことは，小宮路が，子ども一人ひとりに注ぐ教育愛から自然な姿で生まれ出るものなのだろう。子どもたちにとって，小宮路のその眼差しや微笑みは，学習に安心感を与え，そして柔らかくも響きのある声でねぎらいや励ましの言葉をもらえば，子どもたちが思う存分に表現できることになるのは，当然なこととしてうなずける。

音楽室で学ぶ子どもたちにとって最大の教育環境は，小宮路敏という人間そのものなのであろう。

●歌って・踊って・指揮をして

小宮路がゆったりとした態度で授業を進められるのは，確固たる教育愛が根底にあり，さらに，彼の学習のパターンを子どもたちが適応し，その軌道上を子どもたちが自信をもって，主体的に走る姿があるからだ。

また，小宮路は，歌うことが音楽の中心であるという信念のもとで授業を行う。その証左として，授業の始まりは歌で出発し，終わりにも必ず歌で締めくくられる。特に，授業の始まりは，子どもが主体となった学習が展開される。それが「愛唱歌リクエスト（何曲探検）」という活動である。ここでは，子どもたちが，歌いたい曲を選び，伴奏し，指揮をして，全員で歌う。選ばれる楽曲のレパートリーは広範にわたる。二部合唱であったり，外国曲を原語で歌ったり，ユニークな

踊りが入ったりもする。まさに，あくまでも子どもが主役になって合唱し，踊り，指揮をする音楽活動となる。そんな子どもたちの主体的な活動に対し，小宮路は歌われた歌の出来不出来にかかわらず，心から拍手を贈るのである。

●「記憶の花束」

授業は，教師の一方的な知識の教え込みや技術的な技能習得を伝授するだけでは成立しない。そこには，教師と子どもとのすてきな人間関係の成立が必要となる。小宮路は，子どもとの関係でも自然な工夫を施している。

例えば，小宮路の日程表の中には，担当する8学級の子どもの全員と全教師の誕生日が記載されている。そして，その授業日に誕生日を迎える子どもと教師の名前を音楽室の黒板に書き込み，誕生の記念日であることを紹介する。これは，誕生日に当たっている子どもや教師との，「今ある存在を喜び合うためのもの」であり，これを「記憶の花束」と呼んでいて，とても大切にしている。このような人間愛に満ちた日常の地道な行為こそが，小宮路の授業づくりの基礎となっているのだろう。

教材探し・教材づくりが教育の推進力

教材とは，ある目標に向かって教えるべきことや学ぶべきことの材料となるものである。

音楽科で言うならば，教材は楽曲そのものを指す場合が多い。小宮路は，教材探し，教材づくりこそが教

育の推進力であると語る。これは、玉川学園の創始者小原國芳から「教師はそれぞれ自分の教科書をつくりなさい！ 他人のつくった指導案や創意の借り物であっては、生命あふれる授業が生まれるはずがない。」と直言されたことに大きな示唆を受け、実践に移しているのである。さらに、小宮路は、「大事なことは、教材研究と同時に教師自身が教材を作り、子どもたちに歌ってもらうことであろう。」と考え、今でも多くの子もたちに歌い継がれている楽曲を数多く作曲した。それらは、『愛吟集』（玉川学園編）や教科書などで取り上げられている。

●飾りはいらない

「歩いて行こう」は、小宮路の傑作である。軽快なリズムの中にも大地を踏みしめる力強さを感じるこの楽曲は、歌う人聴く人に、勇気と希望を与えてくれる名曲である。しかし、この曲には完成に至るまでに、秘めたエピソードがある。小宮路が作曲したばかりのこの曲を、作曲家であり恩師でもある岡本敏明に見てもらった。しかし、4小節の前奏のうち、最初の2小節（ドラマチックに雰囲気盛り上げようとした部分）を岡本は、事も無げに削除してしまった。小宮路にとっては、この4小節は自慢の前奏であったし、恩師からの褒め言葉を期待していた。だが、岡本の指導は小宮路の思いとは逆に、簡潔な前奏を求めるという結果となった。「ベタベタ飾りの多い作品ほど、飽きられるのが早いものです。単純で簡潔な曲ほど子どもの感性を育てることを大切にしてください」と説く岡本の言葉は、小宮路の教師としての心の眼を開くことにつながり、今なお、心の糧として大切にしていると言う。

●たった1個の訂正（八分休符）が隠し味に

「もしもコックさんだったなら」は、教科書にも掲載されている楽しい楽曲である。この歌も、多くの子どもたちに歌い継がれている小宮路の力作である。流れるような美しいメロディと躍動するリズム、そして明快なハーモニーの組み合わせが何とも言えず素晴らしい。しかし、この曲にも、楽曲として、さらに磨きがかけられたというエピソードがある。この楽曲を教科書に掲載する

ことが決定されたときのことである。小宮路が編集会議の席上、他の編集委員からのアドバイスを受けた。歌詞の「コックさん」の部分がすべて四分音符であったところを、1箇所八分休符を入れてはどうかという提案だった。小宮路は、率直にその提案を受け入れ、現在歌われ続けている楽曲が完成した。「コックーさん」であったものが「コックさん」になり楽曲に締まりが出た。たった1個の八分休符が隠し味となり、一層魅力ある料理として仕上がったわけである。

教育は、個々への尊重なり

音楽の授業は、どちらかと言えば集団活動や一斉指導に終始することが多い。それだけに子ども一人ひとりに教師の意を払うことが疎かになりがちである。

小宮路は、「教育は、個々への尊重なり」の理念のもとに、子どもたち一人ひとりの「活動記録ノート」を備えていた。演奏発表に対する教師や友達の感想、その子の長所（短所はない）、紹介したい詩、学校行事での活躍ぶりなどをそのつど記録した。もちろん活動の写真も添えてある。そのノート数は、5・6年生8学級の全児童数である、300冊を超えたものとなった。

子どもたちは、そのノートを、休み時間や放課後などに音楽室の棚から取り出して、喜々とした表情で読んでいた。小宮路は、その姿を見て、子どもたちとの心の繋がりを感じていた。そして卒業時、このノートを子どもたちに贈ることにしていた。子どもたちは、ノートを開くたびに、過ぎ去った時間と、無形となった音楽の表現が、励ましや賞賛の言葉として残っていることをこの上ない喜びとして感じたことだろう。ちなみに、これまでに約2千余名の教え子たちが、このノートを受け取った。こんなことにも、小宮路の教育にける愛の精神と弛まぬ努力の一端を見つけることができる。

これらのことから、小宮路敏先生による「教師と子どもと音楽が三位一体」となった教育の原点を、自然な姿としてとらえることができたのである。「名人の授業」と冠せられる本稿を、小宮路敏先生は本意としないだろうと思いつつ。🍷



▲音楽会の曲の練習



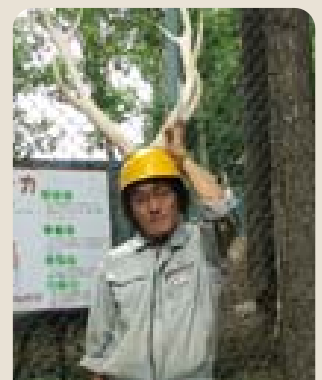
▲グループ発表の手伝い

動物園といっしょにできる教育

旭川市旭山動物園

飼育展示係学芸員

奥山 英登



動物園と教育普及活動

動物園と聞くと、家族で出かけて動物を見ながら休日を通すというレジャー施設のイメージが強いかなと思います。しかし、実際には、種の保存や調査研究など、様々な使命、役割が求められています。教育普及もその一つです。

たいがいの動物園は、園内ガイドやワークシートの作成、出前授業、所蔵標本の貸し出しなどを行い、教育普及に大変熱心です。当園でも、同様の学習プログラムがあり、今年度からは遠隔授業の「i、ね」とわく授業」も始めました。(写真①)

教育普及活動は、今や動物園の大切な事業の一つです。動物園を学習に取り入れたいと思われる方、地域の動物園にぜひ相談してみてください。気軽に応じてくれるはずです。

ゾウに乗ることだって考えますヨ

とは言っても、相談を受けて一番困るのが「何でもいいんで、何かやってください」です。何でもいいのであれば、ぜひゆっくり見学してください。そして、ただ見学するのではなく、解説看板をよく読

む、動物を比較観察するなど、意識的に見学するよう子どもたちに指導してみてください。そうすれば、たくさんのお話を学ぶはずです。

当園には、「これこれこんなことを学ばせたいのですが、どうしたらよいでしょうか?」とご相談ください。「これをやりたい」ではなく「こんなことを学ばせたい」と言われたほうが、「こんなことどうですか?」とアドバイスしやすいものです。学習プログラムの利用に限らず、先生とともに新たに園内の活動を考えたり、双方で単元全体を創り上げたり、単元の場面場面に動物園が関わることもできます。もちろん、動物園に丸投げするのではなく、言の裏に先生の熱意が秘められてなくてはなりません。先生の熱意と学習の意義さえあれば私たちは先生に次のようにお話ししています。「学習上、必要とあれば、子どもたちがゾウに乗ることも考えます。」

動物園の動物は野生動物

小学校低学年を担当する先生から、「子どもたちにとつてガイドは難しいので、ゾウにふれたり、エサを与えたりさせたいのですが。」という相談を受

けました。情操教育の観点から体験させたいとのことでしたが、丁重にお断りしました。

飼育されているということで議論はありますが、動物園のゾウやサイ、ライオンたちは、そもそも野生の動物たちです。野生動物に出会ってもさわることはできませんし、ペットの犬とは違って、人間にさわられてうれしいと思う野生動物はいません。食べ物を与えられたとしても、知床のヒグマや日光のニホンザルに起きていない問題を見れば、それが決してほめられる行為ではないことが理解できます。芸を仕込み、ショーを行うなんて、野生動物に対し、できるはずありません。

当園では、動物園の動物を、野生動物として魅力を伝え、その感動から、野生動物との共生に気持ちを発展させてもらいたいと考えています。(写真②)当園は、野生動物に対して曲解を生むような展示や教育活動は行わないのです。したがって、「ゾウに乗る」ためには、この観点をふまえた上で展開される学習でなくてはならないのです。

旭山動物園教育研究会

このような観点で教育活動に取り組んでいると、



▲i-ねっとわーく授業。画面に映し出された職員と子どもたちが会話を交わす。



▲樹上生活者であるオランウータンの行動を魅せる。高さ17メートルの頭上をなんなく渡っていく。



▲園内見学研修をおこなったワークショップのーコマ。動物園と学校の双方理解の場。

先生と衝突することもあります。学校の現場を理解したい気持ちと、学校現場に理解してもらいたい気持ちとの間に、少なからず溝を感じることがありました。その溝を埋めるために、双方の交流の場を設けようと、二〇〇五年七月二十八日、旭山動物園教育研究会を設立しました。

会員には、小中学校の先生をはじめ、教員養成大学の教官をされている方や、教師の卵である学生もいます。学校と動物園にとどまらず、「卵」と、それを育成する大学も含めて三者一体となつて、子どもたちに動物のすばらしさを伝えることを目的としています。

活動では、それぞれの「顔」を知ることが最も重要であると考え、年二回のワークショップ開催（写真③）やメーリングリストで、実践交流や意見交換を行っています。また、会員には動物園イベントのお手伝いをしていただいたり、学校向けのニュースレターに執筆していただいたりと相互に助け合いながら会を運営しています。

連携融合から得られるもの

自前で細々と行っている研究会ですが、着実に相互理解、連携、融合が進んでいると思っています。研究会のつながりから年間にわたって動物園と一緒に授業実践する会員の先生も現れました。

その先生は、小学二年生を担当しており、まず、生活科の動物飼育の単元で実践しました。導入とまとめの場面で出前授業に出かけ、モルモットやニワトリを貸し出し、最後は子どもたちが来園して、動物の返却式を行うというものです。学校での飼育は、子どもたちが主体となり、土、日曜日子どもたちが世話しました。「命に土日もない」ということを実践してもらいたかったからです。動物の世話は大変だったようですが、たくさん思い出ができたようで、返却式で子どもたちの寂しそうな顔がとても印象的でした。

当初の予定にはなかったものの、後日、道德の時

おわりに

間で、「いただきますを考えよう」をテーマに食育教育の出前授業も行いました。貸し出したニワトリを再度学校に連れて行き、「飼育したかわいいボーちゃん（ニワトリの名前）の仲間は、僕たちに食べられている」という視点から考えてもらったのです。生活科での飼育体験のおかげで、テーマをより深く子どもたちに落とすことができたと思っています。

その他にも、VTR教材の作成や年度末には一年間の総括として、「i-ねっとわーく授業」をするなど、様々な連携活動を行いました。

長期にわたる連携のおかげで、子どもたちは動物、さらには命について、肌で感じ取ることができたと思います。その学校の校長先生は、「本校のためにいろいろしてもらって恐縮です」とおっしゃいます。私は、「ここまで関わらせていただいて恐縮です」と思っています。先生の協力和熱意がなければできないことでしたし、先生とともに子どもの成長を見ることができたのですから。

当園では、今、総合学習や生活科での利用が多くあります。しかし、動物園での学習展開はまだまだまださまざまな可能性を秘めていると思います。理科はもちろんのこと、算数・数学、英語、音楽などでも、私たちには思いもつかない実践ができるかもしれません。

私たちは、学校が動物園を「利用する」のではなく、「活用する」のでもなく、「学校と動物園の双方が教育的な可能性を共用する」ものだと思っています。協力して、ともにすばらしい教育ができればと思っています。

旭山動物園の教育活動は、同園HPでもご覧になれます。
<http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/>

沖縄県



未来を拓く「六諭のころ」

名護市立名護小学校校長
比嘉 啓文

本校は、郷土の偉人・程順則名護親方龍文の六諭の精神に基づく学校経営を推進している。

「六諭」とは、今から約300年前、程順則が中国から持ち帰った教書「六諭衍義」である。それが、薩摩を経て江戸幕府8代將軍徳川吉宗の手に渡り、和訳され、各藩の藩校や寺子屋で、教本として200年もの間使われてきた。「六諭衍義」は、わが国最初の道德の教科書といわれ、いつの時代でも通用する「不易の価値」をもつ教えであると高く評価され、本市では、その精神が現在も脈々と受け継がれている。

六諭のころとは、

「父母に孝順なれ」「長上を尊敬せよ」

「郷里は和睦せよ」「子孫を教訓せよ」

「各々生理に安んぜよ」「非為をなすなかれ」

の六つの教えである。道德の指導内容を分析すると、すべて「六諭のころ」に到達する。「六諭のころ」は人間教育の原点である。

本校は、平成11年度から「心の教育推進校」の指定を受け、「未来を拓く心を育てる教育活動の在り方」をテーマに、継続8年の研究を推進している。その心づくりの中核に「六諭のころ」を位置づけている。

「未来を拓く心」とは生きる力の核となる豊かな人間性であり、「六諭のころ」そのものであるとの共通理解のもとに、花咲きランドのボランティア活動、沖縄の誇る海を活用した体験活動、郷土の伝統文化の学習等、豊かな体験活動を取り入れ、感動体験に基づく心の教育を推進している。最近では保護者の関心も高まり、各家庭でも「六諭」の実践が広がりつつある。

「六諭のころ」は本校建学の精神であり、未来を生きる子どもたちのため、さらに努力していきたい。



愛媛県



みどりをさぐる

松山市立みどり小学校教諭
桐山 真美

本校の開校以来17年にわたる教育目標「生きる力をはぐくむ」を具現化するため、分離統合した久枝小・宮前小校区の伝統を受け継ぎ、両校区の「人・もの・こと」と児童の主体的なかかわり合いを核とした学習づくりが進められてきました。

校区に根づいて生きている「縄文の昔から続く、土と水と人とかかわる営み」が、この地域に現在の潤いと豊かさを生み出し、そこに地域と学校と児童が織りなす文化の独自性がうかがえます。

本校では、地域の絶大なバックアップにより、異年齢集団による登下校や、清掃・遠足・児童会活動、運動会等の活動を継承しています。児童に、校区の「人・もの・こと」を教育的文化財産として捉え、「単に見て回る 教えてもらって巡る＝ふるさとをめぐる」から「自ら問題意識をもって尋ね、さぐる＝ふるさとをさぐる」へと価値転換させる試みを進めています。

この試みを「みどりをさぐる」として教材化しています。これは、教師の教材開発用として地域素材を洗い出してまとめたものですが、子ども自らが「さぐる」ための資料としても再開発しています。例えば、校内施設等の地図記号を子どもから募集し、「校内地図記号ウォークラリー」として実施すると、子どもの目線に立った先輩後輩のかかわりが生まれました。以後、「校内植栽地図」、「校区内の桜地図」などの作成へと取り組みを広げています。そして、「いつ、どこで、だれが、何を、どうしたか」だけでなく、「なぜ、何のために、どのような意味があり、今後どうなっていくのか」までを自分が追求し、さぐったことを記録し、ふるさとを誇りに思う実感を得ることを願っています。



神奈川県



「教育特区」を最大限に生かした教育実践を

星槎中学校校長
金子 肇

本校は、平成17年4月に内閣府より「不登校等生徒支援教育特区」の認定を受けた中学校として横浜市緑区に開校した学校である。本校が教育特区認定を受けている内容は、生徒の実情に合わせ、必ずしも学習指導要領によらない教育課程を弾力的に編成できる、IT等を活用した不登校生徒への学習支援、校地・校舎の自己所有要件の緩和の3点である。

現在在籍している生徒の多くは軽度発達障害を抱える生徒であり、小学校時代に学習のみならず対人関係でもつまづいた経験を持っている。本校ではこうした生徒に対し、教育特区の特徴を生かし学習指導要領にはない「SST（ソーシャルスキルトレーニング；社会適応指導）」、「表現」、「総合」の3教科を教育課程に組み入れている。

「SST」では、自分の周りの人たちの状況・立場を理解し、自分自身を客観的に見つめ、行動することを目標に、ゲームや話し合い、ロールプレイなど様々な手法を使い、直面している問題に対しての対処の方法や状況把握の力を身につけさせている。

「表現」では、「聞く」「話す」を主体に、生活の中で豊かな言語表現を身につけることを目標とし、理解語彙の拡大、正確な言語表現等の定着を図っている。

「総合」は、「SST」及び「表現」で身につけた力を総合的に発揮する場として、設定されたテーマに基づいて話し合いを行い、「実際にやってみる・やり遂げる」ことを大切にしながら、パーティーや写真展等のイベントを行っている。

今後は、この三つの教科を柱として、生活の様々な場面で生徒たちにより多くの成功体験を与えていきたいと考えている。



秋田県



なまはげの里をみつめて

～伝統文化を尊重する教育の実践～

男鹿市立北陽小学校校長
嵯峨 裕子

男鹿国定公園が学区にある。屋上からはハタハタ漁で賑わう日本海を挟んで白神山地を遠望し、教室の窓からは“お山”の美しい姿を眺めることができる。

本校は、豊かな自然や文化の中で“お山”の“なまはげ”に見守られ学んでいる児童数111名の学校である。

「我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業」協力校としての研究テーマは、「ふるさとを愛し、主体的に学ぶ子どもの育成～なまはげの里をみつめて～」である。

本校は平成13年に4校の統合で発足したが、4校それぞれの特色あるふるさと教育を受け継ぎ、クラブの時間には“ふるさと先生”が来校し、民謡や和太鼓、茶道等で本物の充実した活動が行われる。これらに加えて、“なまはげ”を総合的な学習の時間の中心課題に据えた。生活科等との関連を図り、6年間を見通した年間指導計画の作成である。各学団の指導目標は「なまはげに親しむ」「なまはげを正しく理解する」「なまはげを考える」である。また、地域探訪や民謡実技などの教員研修を実施し、“何度も繰り返して”“自己評価”を指導の手立てのKey-Wordとして取り組んでいる。

特に、人口減少や価値観の変化を踏まえ、伝統文化継承に携わる人々の思いや願いから、“よさと課題”に目を向けさせている。自分たちで何ができるかを考え、さまざまな形で外に向けて発信し、実践する子どもたち。2月の夜、柴灯まつりでは、なまはげ学習をまとめた手作りパンフレットと全校児童手作りのマスコットを観光客に手渡し、おもてなしをした。達成感や誰かに喜んでもらったうれしさを味わった子どもたち。本物に触れる学習を、「わたしは“なまはげの心”を残し、自信をもっていきたい。」と振り返った。



『生き抜くための数学入門』

新井 紀子 著（理論社 YA 新書）

『数学的な構え』を学ぶ

評者 室城 秀之（白百合女子大学教授）

私は国語国文学科の教員だが、数学を入試に課すべきだと、幾度も言ってきた。もちろん、取り入れられずに現在に至っている。国語国文学を研究する際にも、数学的な思考がぜひとも必要だと、常々感じているからである。本書によれば、「数学的な構え」ということになる。特に、卒業論文の指導をする際に、学生の「数学的な構え」のなさを強く感じる。主張はあるが説明のない論文、説明をしているつもりでいても説明になっていない論文を多く読まされて、毎年、頭をかかえることになる。

本書の「1回めの授業」は、「かけ算を宇宙人に教えよう」だ。以下、「数学的な構えをチェック」「俳句の可能性は無限大か?」「億万長者になる方法」「国語と数学の深い関係」……と、十六回にわたって、魅力的な紙上授業が展開される。「国語と数学の深い関係」では、「国語的論理力」の必要性が説かれる。まさに、



わが意を得たりの思いで読み通した。

現代を生き抜くために必要なのは、「……とは何なのか?」と「なぜ……なのか?」という問いに、きちんと答えられる力だというのが、著者の主張である。著者は、これを、『とは』力と『なぜ』力、と言っている。この主張を、円周率とは何なのか? 円周率はなぜ3以上なのか? という問いをきっかけに、私たちの身近な問題や、私たちが習ったさまざまな数学の問題を例に挙げながら、三人の生徒役との対話をとおして、わかりやすく説明してゆく。

教育の現場で、数学に限らず、あらゆる教科で、本書が問い続ける『とは』力と『なぜ』力、を身につけさせることが必要だと、強く感じた。

『図書館のプロが教える 調べるコツ』

浅野 高史 + 神奈川レファレンス探検隊 著（柏書房）

『学校図書館にも有益なレファレンス入門書』

評者 岩崎 実香

（栃木県立栃木農業高等学校教諭）

学校図書館に来館する生徒からの質問は、「面白そうな本はありませんか?」という漠然としたものから日常生活の疑問、レポートの題材など多岐にわたる。それらに対応するレファレンスは、図書館業務の柱をなすものといえる。

しかし、学校図書館の現状を見ると、専門の司書が不在の学校もあり、平成十四年、各校に配置が義務づけられた司書教諭はまだ実務経験が浅く、手探りでレファレンス業務にあたっているケースも多い。

本書は、そうした学校図書館の現状に一役買う、レファレンスの入門書である。図書館員の学習会である「かながわレファレンス探検隊」によって執筆された本書には、経験を通して得られた高度なレファレンステクニックが惜しげもなく収められており、会話を多用した平易な文章とイラストで、図書館の知識がな



い人にも読みやすい。

そして、レファレンスツールの紹介が具体的に分かりやすいことも魅力の一つである。百科事典や一般書などの図書だけでなく、インターネットも駆使したレファレンスの実例が四十例収められており、各例の回答にたどり着くまでの過程はまるでドラマのように展開されている。また、各例の最後にある「情報は足で稼ぐ」「調べて分かる自分の本棚」といった格言のような言葉は、図書館業務の奥深さを教えてくれる。

図書館は、図書を含めた情報を活用できる人がいて初めて生かされるものである。レファレンス能力を向上させ必要な情報を迅速に提供することが生徒の学ぶ意欲につながる。一般の教員にも活用していただきたい一冊である。

Column

10代心のカルテ その6

香山リカ（精神科医・帝塚山学院大学教授）



自

分の子どもが「精神科にかかりたい」と言い出したとき、多くの親はどう反応するのだろうか？ 本人が未成年者である場合、医療を受けるかどうかの決定権は誰にあるのだろうか。

そう考えたのは、高校生のアカネの診察を通してだ。過激なダイエツトから月経が止まったアカネは、最初、母親に伴われて私が勤務するクリニックの婦人科を受診した。その後はひとりで何度か通院していたが、ある日、婦人科医は「あなたは拒食症の傾向もあるから、精神科の医師にも会ってみたら？」とすすめ、私の診察室にやって来たのだ。

生

まじめなタイプのアカネは、進路のことで親と意見が対立し、そのストレスから逃れるために、「体重を減らす」という目に見える目標に必死に取り組んでいるように見えた。「たしかにあなたの場合、ストレスで心が力チ力チになってるね。ちょっと心をほぐすお薬を使いながらお話してみようか」と話すと、アカネはすぐにうなずいた。

最初は緊張気味のアカネも、一回、二回と通ううちにだんだんリラックスしてきて、過干渉気味の親への不満などを口にできるようになった頃には、ダイエツトにもそれほど固執しなくてすむようになってきた。

子どもの心の医療 受ける権利は

そ

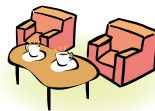
アカネの父親から抗議の電話がかかってきたのは、そんなときだった。父親は開口一番、「ウチの娘は精神に異常なんかきたしてません！」と強い口調で言った。「身体が調子がおかしい、というから、そちらの病院に行かせただけで、心の薬だカウソセリングだ、なんてことを頼んだ覚えはない！」。話すうちにどんどん激昂する父親に、私は「いえいえ、異常だなんてそんなつもりはありませんよ。あくまで婦人科の治療をスムーズに進めるために、こちらは補助的にお手伝いをしていただけです」となるべく穏やかに答えたのだが、その怒りはおさまらない。「精神科だなんてとんでもない、もう行かせませんよ！」という言葉を最後に、電話は切れた。

それから、アカネは二度と私の診察室には来なかった。本人は毎週のカウソセリングを心待ちにしているようだったが、未成年者の場合は、医療を受けるかどうか親が決めるしかないのだろうか。私にはアカネが、精神医療を受ける権利を親に奪われてしまったようにも見えた。今ごろアカネはどうしているだろう。過激なダイエツトから脱出して、心身の健康を取り戻しているだろうか。ときどき思い出せば、やるせない気持ちになる。

読者のページ

Educo Salon

【エデュコサロン】



●ご意見・ご感想をお寄せください

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
教育出版 Educo編集部

FAX: 03-3238-6975

e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

前号の『Educo』（2007年冬号）について、読者からお寄せいただいたご感想を紹介いたします。

●「教育NOW」の中で、これからの学校づくりの視点として「攻めの学校づくり」の必要性が指摘されています。なぜかとても新鮮に感じたのは私だけでしょうか。昨今、教育界の不祥事への対応力を見るに、いかに守りの学校体制が多いことが。今こそ、教職員が一丸となって、伝統ある自校の強み（長所）を再度洗い出し本気で取り組むことだと再認識しています。「北から南から」の「かわまた教育推進プラン『三つの学習プラン』」の内容は、攻めの教育委員会、攻めの学校づくりのよいモデルとして大いに参考にしたいものです。

（青森県 久保富男）

●子どものいじめが深刻な社会問題となっ

ていることに心を痛めていますが、「地球となかよしインタビュー」池上彰氏のメディアの取り上げ方と学校の対応についてのお考えには共感しました。特に、いじめの背景としては、粗野な言葉を平気で使う学校の言語環境の悪化と、自分の意思を伝える言語力の低下が大きいのと思いますので、池上氏の自分の気持ちや考えを文章で伝える訓練が大切ということには同感であり、学校にも積極的な取り組みを願っています。

（新潟県 松田正實）

●特に池上彰さんの「地球となかよしインタビュー」の内容は、現実の学校問題、社会問題にふれて不安感を取り除いてくれるものであり、感銘深いものでありました。このような課題への提言は大変参考になります。

（埼玉県 齊藤宥雄）

●学校の先生方、学校全体を励ます言葉が

あるとよい。先生方に自信をもって教育を行ってもらえれば、必ずよくなると思う。（いろいろな各層からの励まし、エールがよい。）退職者から、授業方法、テクニック（隠れた秘策）を紹介することもよいのでは。

（愛知県 元小学校校長）

●「地球となかよしトピックス」の秋月中学校のコミュニティ・スクール調査研究事業の取り組みは、コミュニティ・スクールの構造、具体的な取り組みの焦点化を図るための組織マネジメントを導入した実行策検討シートの活用、推進事業の目玉としての秋月ルネサンス構想（中秋稽古館、温故知新隊、秋月コミュニティ）など、非常に興味深く読むことができた。特に、「知っておきたい教育NOW」の「小中学校における学校評価の現状と課題」と関連づけて読むと興味が倍増すると思う。

（福岡県 武末正史）



ぼっとな出会い

失敗を恐れないで

UMEZAWA YUKARI

梅沢由香里さん(囲碁・女流棋士)

囲碁は相手があつてこそそのもの

囲碁は、相手の大将の首をとるといっているのでなく、分かち合いのゲームです。このあたりは相手に与えるけれども、ここは自分がいたたくという「与える精神」が必ずないと勝てないんです。かわりばんこに打つのですから、一方が全体を取れるわけはない。そして、相手の表情を読んだり、覇気を感じたりしながら、その中で新しいビジョンが生まれ、流れが変化していきます。その流れを読み取って、どう打っていくのか柔軟に考え、知恵をしぼっていくのが刺激的で、とてもおもしろいところなんです。

対局しているときには、自分がこう出たら相手はどう打ってくるかなど、とても多くのことを考えています。それを対局が終わった後に相手と確認し合いたいんです。これはどう思いましたかとか、こう打っていたらどうやりましたかとか、そういったコミュニケーションを通して、人とのつながりが深まっていくんですね。

発信するエネルギー

「IGO AMIGO」というプロジェクトがあります。二十代、三十代の囲碁ファンがとてもなく、その世代のファンをふやしたいという思いで始めました。会場に入りきれないかと思うほど多くの人が訪れてくださるようになって、アミゴ(仲間)という名にふさわしく、輪が広がっています。囲碁を通じて深いつながりができた友人がたくさんいます。

囲碁に關しての自分のミッション(使命)は、もちろん強くなること、そして、囲碁を普及発展させていくことだと考えています。やはり感情が伴わないと、自分の思いはなかなか伝



2007年2月、初タイトルとなる女流棋聖を獲得。
エコロジー活動が趣味の一つ。「自分にできることから」と、エコバッグ・マイ箸・水筒・ハンカチのエコ4点セットを持ち歩く。

わらないと思います。全体の流れを読んで、今何をする必要があるかを考えていくエキサイト感、相手と向かい合ったときに受ける刺激、そうして自分と相手がつくっていく新しい世界、そういった囲碁の魅力を広めていきたいんです。

子どもに教えるということ

囲碁では、感性による部分もありますが、今何が必要かということをつねに論理的に考え

子どもは失敗を恐れないので上達も早いんです。何にでも失敗はつきものです。大人は失敗に傷ついてしまつて、そこでやめてしまうこともあります。子どもには失敗を恐れない能力があると感じます。自分で考えて失敗しても、次はこうすればいいんだということを学びますから。勝つための工夫も自然にします。そうして自分で工夫するのが一番いいことだと私は思っているんです。

努力したことで得られる喜び

努力してうまくいった快感ってすごいんですよ。偶然うまくいったときよりも、努力を重ねてできるようになったときの喜びはとて大きい。それはやはり、努力した人にしかわからない経験です。

自分で考えて努力したらうまくいって、すごく気分がよかったというのを知っているから、さらに努力を続けられるんです。子どもたちは今はその体験が少ないかもしれない。でも、失敗してもいいから試しにやってみたら、失敗を繰り返しても、自分でできるようになっていくことで、自信につながると思っています。そういう意味でも、囲碁の魅力を広めていきたいと思っています。

▼IGO AMIGO ホームページ
<http://www.igoamigo.com/index.html>

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

地球となかよしメッセージ 2007

地球上の自然や人々となかよくやっていくにはどうしたらよいかを、写真(絵またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

主催/教育出版 101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 TEL 03-3238-6982 FAX 03-3238-6975
協賛/日本環境教育学会 後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

